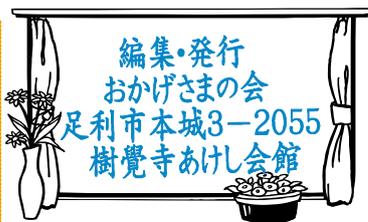


おかげさま



中途障害者

あなたは、表題のような言葉を耳にしたことがありますか？

中途障害者（ちゅうとしょうがいしゃ）。人生の半ばで失明された方を中途失明者と呼びます。同じように、途中で障害を得た方を、中途障害者といえます。

相模原障害者殺傷事件」を特集した「現代思想」10月号に掲載された上野千鶴子氏の「障害と高齢の狭間から」に見られます。

文章の冒頭では、相模原の事件後、同市で開催された在宅医療を巡るシンポジウムで、「相模原事件を取り上げましょうか」とコーディネーターがいわれた。しかし、上野氏が「ここに来る聴衆には、関心がないと思う」と答えるエピソードから始まる。

「なぜか？わたしには理由がわかる。高齢者は自分を障害者とは思っていないからだ。それどころか、障害者と自分を区別して、一緒にしないでくれ、と思っているからだ。脳血管障害の障害が固定して、周囲が障害者手帳を取得するよう勧めても、それに頑強に抵抗するのは高齢者自身である。なぜか？そのわけもわかっている。高齢者自身が、そうでなかったときに、

足利の空に
平和の願いの
梵鐘にの音が響き渡る！

去る9月18日に行われまし
た「響流十方法曹（すべての戦争犠
牲者を追悼し世界の平和を願う法曹）は、
多くの方々の参詣をいただき厳
かに勤まりました。
心配された天気も、法曹時の
小雨も、鐘樓に移動するときは
止み傘を差さずにすみました。
平和を思い・考え、平和の実
現を願い・歩み続けることを誓
い、一人ひとり梵鐘を撞きまし
た。

次の響流十方法曹に向けて、
共に平和への歩
みを続けてまい
りましょう。



障害者差別をしてきたからだ。自分が差別^{さべつ}してきた当の存在に、自分自身になることを認められないからだ。

だからこそ、上野千鶴子氏は講演で「^{よわい}齢を重ねる」とは「^{よわ}弱いを重ねる」ことだと強調しているという。

「超高齢化社会とは、どんな強者も強者のままでは死ねない。弱者になっていく社会であること。すなわち、誰もが身体的・精神的・知的な意味で、中途障害者になる社会である。

脳梗塞^{のうこうそく}で半身マヒの後遺障害が残れば、車椅子生活^{くるまいす}にもなるし、言語障害も残る。認知症になれば、一種の知的障害とっていいし、レピー小体型の認知症なら^{げんかく}幻覚・^{もうそう}妄想などの精神障害も起きる。いくらそう伝えても、いま健康な聴衆には将来への不安を与えるのみで、それなら、と認知症予防や健康寿命の延長のための体操教室がはやるばかりだ。（中略）

いついかなるときに、自分が弱者にならないとも限らない。弱者になれば、他人のお世話を受ける必要も出てくる。そのための介護保険である。それだからこそ弱者にならないように個人的な努力をするより、弱者になっても安心して^い生きられる社会を、とわたしは訴えてきたのだ」

しかし、多くの人が弱者になった自分を受け入れられない。ある講演会のあとの懇親会で、上野千鶴子氏は初老の男性にこう言われたことがあるという。

「脳梗塞で倒れたあと、必死でリハビリをしてようやくここまで来ました。あの時、家族が救急車を呼ばずにいてくれたら、と何度悩んだかしれません」

障害者になった自分を受け入れられない。「役に立ってこそ男」という考えから抜けられない。「社会のお荷物」になる自分を受け入れられない。このような「高齢者の自己否定感」が、老後問題の最大の課題だと上野氏は指摘する。

かつて、足利ホスピスの会の初代根岸会長が言った言葉を思い出した。

「その立場になった時、此处があつてよかった、という集まりにしたい」と。

受け入れると受け入れられる。認めてゆくと認められてゆく。受け入れないと受け入れてもらえない。認めないと認めてもらえない。

いまから ここから あなたのいのち わたしのいのち ー相田みつをー

あけし酔話

お釈迦様の生涯 出家

仏伝には、お釈迦さまの妻としてヤソーダラー、ゴーピー、ミガジャーなどの名前が出てきますが、古代インドでは後継者となる息子をもうけることが家長の責務であり、そのために複数の妻をもつことが認められていたようです。シッダッタもそれに従ったのか、あるいは、親たちが出家を思いとどませようとして、美しい妻を次つぎに与えたとも考えられます。

お釈迦さまの妻としては、後に息子ラーフラを出産したヤソーダラーがよく知られています。彼女はシッダッタの父の妹の娘とも、母方の従妹であったともいわれますが、いずれにせよシッダッタの従妹でした。

出家

現在がいかに幸福であっても、いかに美しい姿であっても、いかに裕福ゆうふくであっても、永遠に続くものではない。どれほど多くの戦いくさに勝ち、たとえ世界の帝王になったとしても、死をまぬがれることはできない。

生滅しょうめつ変化へんかを続ける現実、決して避けられない死の壁。輪廻りんねの恐怖。若きシッダッタには、どれ一つの対しても解決かいとくちの糸口が見えず、かといって投げ出すこともできない、大きく難しい課題がのしかかっていた。

さらに、社会を支配していたカースト制度や、それを支える生活規範を定めた『マヌ法典ふじょうり』の不条理さも、悩めるシッダッタに追い打ちをかけます。



職業等は、その階級によって細分化され、制限されていました。現在でも形を変えて、この制度は生き続けています。生活規範きはんがこと細かく定められ、バラモン、クシャトリアは特に、さまざまな規定にしばられていたのです。

このような状況の中、シッダッタは「出家しゅっけ」します。このシッダッタの出家を「大いなる放棄ほうき」と英訳した学者がいます。

それは、シッダッタがすべてを棄てたことを意味します。不条理な社会制度・生活規範を明確に否定したのです。そして、それらによらない本来のあり方、つまり、すべての“いのち”が互いに尊ばれて、生かし合うことのできる世界を求めたのです。生まれを問うのではなく、その行いこそを問う、そんな“いのち輝く世界”を希求し、そのためにすべてを棄てたのです。

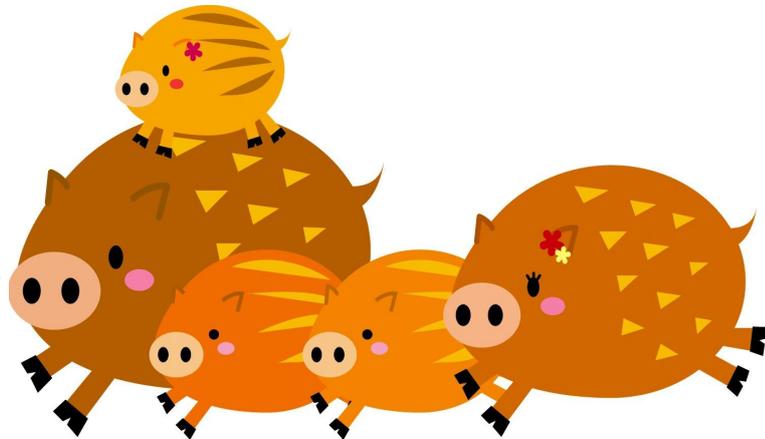
【つづく】



あけし あれこれ

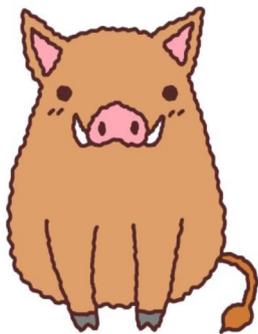
イノシシ (猪)

“暑さ寒さも彼岸まで”
 と言いますが、気温が下
 がり過ぎやすくなりました。
 8月の初めに、2年
 ほど姿をみせなかったイ
 ノシシが境内一面、墓地



一面を隈なく掘り返して行きました。柵を補強し、その後入らなかったの
 ですが、9月の終わりにまた荒らされてしまいました。一度入ると色々な策を
 講じるのか、柵の下を掘り返してでも入って来ます。なかなかの知恵者です。
 これからしばらくはイノシシとの攻防戦です。

イノシシ 偶蹄目イノシシ科



ユーラシア大陸南部、日本などに分布。力持ちで特
 に突進力はかなりの威力をもっている。走るのも速く、
 時速45キロメートル程で駆けることが出来るといわ
 れ、1メートル程の高さのものなら走ることなく飛び
 越えてしまう。また、泳ぎも巧みで、思っている以上
 に運動能力は優れている。元来は非常に神経質な動物

で、見慣れないものなどを見かけると避けようとする習性があるが、不用意
 に近づいたりすると、時には人に向かって
 くることがある。この時イノシシは直進的
 に突き進んでくると思われているが、これ
 は誤りで、他の動物のように急停車するこ
 とも途中で向きを変えることもできる。

臭覚、視力、知能もかなり優れている。
 嫌いなにおいもなく、目でみて判断し、サ
 ルに劣らぬ学習能力をもっている。

